

芥川だより

発行日 * 2023年12月1日 e-mail: ab_87968624@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集 川口 伸
 発行人 下村嘉明
 〒661-0951
 尼崎市田能5-3-10-601
 ☎090-8796-8624

***** 一部200円です *****



若い鳶（足場職人）に教えられる

警備の仕事始めて2年になる。きつい、汚い、危険と言われる3Kの現場を見続けてきた。職人から仕事の厳しさを教えられ仕事の本質を少しは理解するようになった。私は、何の根拠も無いのに、いつの間にか自分の力を過信し仕事への集中心がおろそかになって仕事をなめていた傾向がある。

鳶の若い頭が夕暮れに交通誘導をしている私に向かって、「どんな仕事も楽な仕事はないんですね」と言った。彼は18歳の時に独り独立して頭として頑張ってきた24歳の頑張り屋さんだ。既に子供がいて毎日、早朝から遅くまで猛烈に働いている。時々、「なんで、こんなに仕事をせなあかんのや」と弱音を吐くこともあるが、とにかく働き通してきて、社員を12名と大きくしてきた。若い彼だが、組織が大きくなると、リーダーとして年上の鳶を社長にして彼の権限を分けて共同経営者として互いの個性を生かしてやっている。

自分の18歳の頃を思い出してみると何とも恥ずかしい。ろくに勉強をするわけでもなく、ただ無為に日々を送っていたように思える。何かの壁に突き当たると、簡単に方向を変え楽な方に流されていた。仕事をして金を稼ぐ事への抵抗が心のどこかに絶えずあり、その言い訳を自分以外の環境に問題があるという、身勝手な自分であった。どういう訳か、自分は社会の実体を知ろうともせず、机上の空論のような事ばかりを考えて生きてきた。

そんな自分が警備という仕事を経験し、実に多くの人と接し、なまなましい現実を見せられ、頑固に凝り固まった私の頭をたたかれ少しはほぐれた。彼らの仕事は厳しい。仕事を持つ厳しさを徹底的に私に見せる。何の文句も言わず毎日働く。この懸命さは、どんな仕事にも共通するはずだ。私に欠けていた仕事という事への基本的な姿勢だと思う。文句を言う前に働く、休む間もなく動き続ける。徹底的な働きぶりを目の前で見続けて、私は、自分がこれまで思ってきたことが、いかに未熟かと思知らされた。

死をめぐるあれやこれ(109)

石川 吾郎

『ザイム真理教』のインパクト

最近いろんなところで森永卓郎氏の『ザイム真理教』という本が話題になっているらしい。財務省が中心になって「国の借金でわが国の国民は孫子の世代に莫大な負債を残す」という説を吹聴していて、これはカルト教団と同様の手口だという。森永氏曰く「カルト教団の常とう手段は、「あなたには悪霊がついていきます。このままでは、家族や子孫にいたるまで、被害が及びます」などと言って恐怖心を煽り「悪霊を退治するためにはこの壺を買いなさい」と言って、カネをだまし取る。搾取はエスカレートしていき、やがて信者の生活が根本から破壊されてしまう。財務省がやってきたことも基本的に同じだ。日本の財政は世界と比較して飛びぬけて多い借金を抱え、しかもその借金が増え続けている。その借金は、あなたたちの子どもの世代に付け回され、彼らに不幸をもたらす。それを回避する手段は、消費税率を引き上げていくこと以外にあり得ない。もしそれをしなければ、円や国債が暴落しハイパーインフレが日本を襲う、という神話を語り続けているのだ。」◆この結果三十年間日本政府は緊縮財政を続け、消費増税を断行し、歳出カットを名目に国民に負担を押しつける政策を続け、ごく最近のコスト高によるインフレまで、デフレが続くことになった。◆そしてさらに、ステルス増税が目白押しなのだという。六五才まで支払いが延長される年金制度

の改悪（これで百万円の負担増になるという）、主婦年金の改悪廃止、介護保険の内容を縮小厳格化（介護度一と二の不適用化）、給与所得控除の縮小・退職金控除縮小の検討。少子化対策の財源を医療保険に上乗せ。社会保険料の引き上げ・社会保障費削減の推進。また防衛税導入の時期検討中、など。◆税と社会保障の国民負担率はすでに五十%に迫っている（一昨年で四八%）。江戸時代でも年貢は四公六民といわれ、五公五民となると一揆や逃散が起こるレベルになるといふ。令和の世の日本国民は、江戸時代の年貢と同レベルの負担を負っていることになる。この民主主義の時代に、われわれ庶民はこんな状況におかれていることを知っておかねばならない。

《参考》ネット検索で「森永卓郎の戦争と平和講座」



芥川だより二〇三号 目次 ページ

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム 109	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 117	坂本一光	2
哲学命いの時事放談 67	祖蔵哲	5
大峰奥駈道 73	下村嘉明	7
新型コロナウィルス愚考 その 39	明石幸次郎	8
オクラの山たより 87	因丁生	9
隠された歴史 62	満田正賢	12
道を行く 四六	成瀬和之	15
俳句	影山武司	17
編集後記	S K 生	17
ふみの道草 66	山椒魚	18

素老人☆よもだ帳 (117)

坂本 一光

◆山田太一さん死去

十一月二十九日、脚本家の山田太一さんが亡くなった。八十九歳、老衰の為と報じられた。ありふれた人や家族

を描き、人間とは何かに心を寄せて数々のテレビドラマを世に送った。

「男たちの旅路」(鶴田浩二主演)、
「岸辺のアルバム」(八千草薫主演)、
「獅子の時代」(NHK大河ドラマ、加藤剛・菅原文太主演)、「早春スケッチブック」(山崎努主演)、「日本の面影」(ジョージ・チャキリス主演)、「ふぞろいの林檎たち」(中井貴一ほか主演)など、私はテレビを観、脚本を読み、手に入ればビデオを観るなどを繰り返した。今となれば想像もつかないような、テレビドラマの世界に一大面期を開いた。

私はこれらドラマの幾つかについて本紙に紹介したことがあるが、脚本家の死去の報に接してその一つをあらためて振り返ってみたい。誰であったか、このドラマを観て何も感じない奴を俺は友だちにしないと云った、「早春スケッチブック」というドラマである。

『芥川だより』No. 122、「素老人☆よもだ帳(36)」、2017年より

◆自分をみがく、自分らしい自分になる、あるいは、『てめえの面 磨きもせず 友達面する奴 大嫌い』について

年を取ると、あれは夢か現か、ふとわからなくなることがある。たとえば、もし私が校長なら、未来ある中学生に今のうちにこんな話をしておきたい、とそう

思ったとする。すると、もう本当に話をしたような気になって来るから不思議だ。標記の主題「自分をみがく、自分らしい自分になる」についてもそうだ。てめえの面をみがきもせずに政治家面をする輩がわが国にも海の向こうにもいて握手などをしている昨今の状況に腹を立てているうち、夢か現かわからなくなってきたが、校長の思いはふくらむばかりであった。

なお、『てめえの面 磨きもせず 友達面する奴 大嫌い』は、その昔、長渕剛が歌う『High・Bye・Bye』という歌の文句であった。以下は校長の話。

『皆さん、今日は、年度始めの始業式、一年を始める大事な節目の日です。今日、私が皆さんに話したいテーマは、「自分をみがく、自分らしい自分になる」ことについてです。

その前に、話しておくことがあります。新しい二年生の皆さんは、小学生のときと違って、この一年で心も身体もずいぶん大きくなりました。ものの見方や考え方も、広く、深くなった。これから、どんな二年生になろうとしていますか。それが問われています。三年生の皆さんは、そういう二年生のときを終えて、中学生として最後の一年を迎えました。どんな風に、この一年を過ごし、自分自身の未来を展望するか。そのための課題は何か、それが問われています。誰にとっても、

今日は昨日の単なる続きなのではありません。他人から見れば小さくても、日々新たに、自分らしい飛躍をめざしたい。

次に、明日になれば、私たちは、新入生を迎えます。これからの一年間、みんなそろって元気に、たくさんのことを学びたいと思います。一人ひとりが、自分をみがくことを意識してください。自分らしい自分をめざしてください。

では、自分をみがく、自分らしい自分になるとは、どういうことか。その話に入ります。無責任な言い方をすれば、答えはありません。答えはないし、さらに言えば、「自分は、普通に、ちゃんとやっている」と、ほとんどの場合、私たちは誰でもそう思っています。今さら、何をみがいて、どんな自分になるんだ、と思うことだってある。しかし、そのとき、不意に誰かが横から口をはさんで、「お前は、一体、何てえ暮しをしてるんだ」などと言ったら、私たちはどう思うでしょうか。今日は、そんな話を紹介します。皆さん、座って聞いてください。

皆さんはまだ生まれていない、一九八三（昭和五八）年の一月から三月にかけて、『早春スケッチブック』というテレビの連続ドラマがあった。脚本は、山田太一という人が書いている。何を意図したドラマか。著者のメッセージを読みます。

『いつかは』とニーチェ（著者注：十九世紀後半を生きたドイツの哲学者）が言っています。「自分自身をもはや軽蔑す

ることのできないような、最も軽蔑すべき人間の時代が来るだろう」と。実をいうと、そのニーチェの言葉が、このドラマの糸口でした。テレビを見ていらつしやる人々とそれほど違わない家族の生活を描き、それに罵声を浴びせかけるドラマ。これは、そんなドラマです』

三十年以上も前には、日本のテレビ界にそんな硬いテーマのドラマがまだあったと思ってください。ドラマの中に平凡な日々を送る一家があり、その家族の前に突然、この家族を脅かす一人の男が現われます（男を演じるのは俳優の山崎努。彼は重い病気にかかっている、まもなく死ぬことを知っています。元カメラマンの彼の目は、病気のために随分悪くなっている。ときどき、突然の痛みが襲ってくるような状態ですが、医者にかかろうともしない。

さて、平凡な一家には、高校三年生になる息子がいます。この息子は、実は、この男の子どもであるという設定です。息子は、本当の父親は死んだと聞かされている。男は、死ぬ直前になって、名前も知らない息子がいたことを思い出し、死ぬ前に息子に何かを伝えたいと考え、姿を現すのです。ただし、男は（そんなことは、隠したってすぐにわかってしまうのですが）、息子に自分が父親であるとは明言しません。また、男の口から出てくる言葉は、汚いというか、激しいというか、ほとんど罵声です。しかも、執拗

で、長い。校長の話みたいで、そのつもりで、聞いてください。男のせりふの合間に、高校生の息子や母親などが短く口をはさみますが、それは省略。では、二、三の場面を、急いで紹介します。

◇『お前らは、骨の髄まで、ありきたりだ』

—罵詈雑言の数々

【場面1】

「のむか？ ウイスキー」

「待てよ」

「いまなんとかいったな？」

「ウイスキーを飲むか？ といったら、まだ、といった」

「まだ高校生だから、ということか？」

「いやあー自分をおさえるってことはい

いことだ。そうやって、少しずつなにか

を諦めたり、我慢したりする訓練は、し

なきやいけない。そういうことをしねえ

と、人間、魂に力がこもらねえ。しよつ

中、自分を甘やかして、好きなようにし

てるんじや、肝心な時に、精神にあんた、

力が入らねえ。なにかをドカンとやるこ

とが出来ねえ」

「高校生だから酒のみません、女房が

いるから他の女とは寝ません、立小便は

しません、満員電車では屁はたれません」

「そんなことは、みんな、くだらないこ

とだ。守る値打ちはねえ。しかしな、そ

ういう、小っちゃなこと、自分を押しさ

える訓練しておくことは、絶対に必要

だ。そういう訓練をしなかった奴は、肝心な時にも自分をおさえることが出来ねえ。これだけは、いっちゃあいけないなんてことも、しゃべっちゃまう。しゃべらないまでも、顔に出ちまう。そういう、安っぽい人間になっちゃまう」

「毎日、自分を押しさえる訓練をしなきやいけない。自分をおさえる。我慢をする。すると、魂に力が貯えられてくる。映画が見たい。一本我慢する。二本我慢する。三本我慢する。四本目に、これだけは見ようと思う。見る。そりやあんた、見る力がちがう。見たい映画全部見た奴とは、集中力がちがう」

「そういう力を貯えなきやあいけない。好きなように、やりたいようにしてちゃあ、そういう力は、なくなっちゃまう」

「しかしだ。それにはあんた限度つてエものがある。見たい映画を三本我慢し四本我慢し六本七本八本我慢してるうちに別に見たくなくなっちゃまう。なにが見たいんだか分らなくなっちゃまう。欲望が消えちまう。それじゃああんた、力を貯えることになりやあしねえ。力を、生命力を、むしろつぶしちゃまうことになる」

「我慢をしすぎて、力をつぶしちゃあいけない。自分の中の、生きる力をな」（注1）

「生きるってことは、自分の中の、死んで行くものを、くいとめるってことだよ。気を許しやあ、すぐ魂も死んで行く。筋肉もほろんで行く。脳髓もおとろえる。

なにかを感じる力、人の不幸に涙を流す、なんてエネルギーもちえちえまう。それを、あの手この手をつかって、くいとめることよ。それが生きるってことよ」

【場面2】

「立ち止まり）干乾しにしる。俺なんざ、干乾しにしちまえッ（と怒鳴る）」

「静かに）病気はなおしやあいいのか？

長生きはすりやあするほどいいのか？」

「（一つ湯呑みを投げつけたあと）そうはいかねえ。身体が丈夫だって、長生きしたって、なんにもならねえ奴はいくらでもいる。なにかを、誰かを深く愛することもなく、なんに対しても心からの関心を抱くことが出来ず、ただ飯をくらい、予定をこなし、習慣ばかりで一日をうめ、下らねえ自分を軽蔑することも出来ず、俺が生きててなにが悪い、とひらき直り、魂は一ワットの光もねえ。そんな奴が長生きしたって、なんになる？ そんな奴が病気治したって、なんになる？（急須をほうり、魔法瓶をほうる）」（注2）

【場面3】

「一体、お前らの暮しは、なんだ！」

「どうせ、どっかに勤めるか？」

「どうせ、たいした未来はないか？」

「バカいっっちゃいけねえ。そんな風に見切りをつけちゃいけねえ」

「人間てものはな、もつと素晴らしいもんだ」

「自分に見切りをつけるな」

「人間は、給料の高を気にしたり、電車がすいて喜んでりするだけの存在じゃあねえ」

「その気になりやあ、いくらでも深く、激しく、ひろく、やさしく、世界をゆり動かす力だって持てるんだ」

「偉大という言葉が似合う人生だってあるんだ」

「あんな親父と似た道を歩くな！」（義理の親父を演じたのは河原崎長一郎）

「親父に聞いてみる！ 心の底までひっそらうような物凄え感動をしたことがあるかってな！」

「自分をみがくんだ。世界に向って、俺を重んじよ、といえるような人間になるんだ。家庭が幸せなら、事足りりなんていうようなあんな奴の（ように——）」

「愛してるわけがねえ。ああいう男が、人を愛するなんてことが出来るわけがねえ。自分のことばかりよ。心の中のぞいたら、安っぽくて、簡単に、カラカラ音がしてるだろうぜ」

「適当に生きるなんてことを考えるな。体裁のいい仕事について、女房貰って、子供つくって、平和ならいいなんて、下らねえ人生を送るな」

繰り返します。これは、普通に、誠実に暮らしている人々に罵声を浴びせかけるといふ衝撃的なドラマでした。しかし、わがままで自分勝手な男が、間もなく死

ぬとわかったとき、自分の息子に何かを伝えようとしているという仕掛けをして、生きるということは一体どういうことなのかを、鋭く問いかけるドラマでもありました。少なくとも、私は、三十四歳のときに、これは初めて言いますが、なぜかまだ無職であるのに結婚していて、小学生と保育所に通う子どもがいたときに見たこのドラマの衝撃を覚えています。

「一体、お前の暮しは何だ！」と、自分でもそう思った。それで、本箱をひっくり返して脚本（注3）を探し出し、ちょっと長くなりましたが、いま引用した部分を確かめました。もつとも、三十四歳のときの己の衝撃を中学生にしゃべる校長もどうかしているといえ、どうかしている。どうかしています、こういう話はいま聞いておかないと、皆さんは、二度と聞く機会を持たないかもしれない。そんなことを、勝手にですが、痛切に思つて紹介しました。

さて、どんな人でも物事でも、それが何であろうと、その内部には、いつでも肯定される一面と否定される反面があります。何人も、何事も、その中に矛盾や対立、葛藤を抱えている。そのことを分つたうえで、そのどこに共感し、どこに反発するか。私たちはそれを考えなければなりません。このドラマにしても、私たちは常に、何かに共感しつつ反発し、反発しつつ共感するというのが、本当のところなのかもしれません。

意識して自分をみがく。自分らしい自分になる。この一年、それをめざしてくださいと言いました。しかし、それは、口で言うほど簡単にできることではない。この作業は、第一に、あるときは自分一人でやる孤独な作業になる。しかも、第二に、常に、自分の内と外にある矛盾や対立、葛藤にまみれた作業にもなる。それを覚悟したうえで、それでも私たちは、どうすれば自分をみがくことができるか、自分らしい自分になることができるかを考え続けたいと思います。ためえの面をみがきもせず友だち面をするわけにはいかないのです。

今日の話は、これで終わります』

（注1）『生きる力』という言葉は、ドラマの十五年後に告示された小中学校の学習指導要領に、『いかに社会が変化しようとして、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力』などの『生きる力』の育成が宣言され、日本の教育界では特別な意味を持つ、いわば特殊業界用語になった。ドラマの中のこの言葉は、そんなことになるとは誰も思ひもしなかった頃に普通の意味で使われた、大変まれな日本語の用法である。

（注2）『魂は一ワットの光もねえ』のセリフを聞いたとき、その頃オーバー・ドクター（OD）六年目の就職浪人だった私は、兄貴に言われた言葉を思い出した。

三十半ばになってもまだ職のない私に兄貴は言ったものだ。「お前なあ、三十ワット

の電球でも三畳の部屋ならまあ何とか

明るいけど、六畳の部屋には暗いんぞ。

高望みせずにええ加減に就職せえや」と。

この指摘は後で思えば当たってはいたが、

そのときの私は、俺は三十ワットの電球

か、と思ったものである。以前にも書いた

が、当時ODと呼ばれる博士浪人は理

系を中心に全国に五千人ほどいた。その

大半の若い研究者たちが三十ワットに過

ぎない我が身の程も知らず、大広間を求

めていたとは、私は今でも思っていない。

あれから三十数年、理系文系を問わず現

在の若い研究者たちの境遇は、非正規で

働く者が四割だという日本の労働状況

(つまりは政治の状況)を反映して、も

つと厳しいものになっている。

(注3)『早春スケッチブック』の脚本は、

二〇一六年十二月、『山田太一セレクショ

ン』として新装版が里山社から発行され

ていて、今でも読める。

(かたちは心であり、心はかたちになる

■大分の素老人)

「哲学爺い」の時事放談(67)

祖蔵 哲

『いじめの哲学』

思わず溜息が出る。もう今年も終わるのか。「時は流れる」のが早い。いや時は流れるのでなく私が流されているのだ。

「時」とは何か。こんな風に考えている間に2023年はもうすぐ終わる。今年も様々な出来事があった。ウクライナでの戦争開始から1年目の2月にはアメリカが中国気球を撃墜。3月には岸田首相の演説会場で爆発物が炸裂。5月には陸自ヘリ墜落事故。7月にはビッグモーター不正請求。8月は福島原子力発電所処理水の海洋放出。10月にはハマスが対イスラエル大規模作戦を開始。そして先月11月米オスブレイン墜落事故。その他、ハワイ大火災、トルコ・シリア大地震などの「自然災害」も頻発している。世界はますます混乱してきているようだ。また今年もAI人工頭脳が再注目された。

「生成AI」である。もはや使うのが常識になりつつあるが問題は積み残されたままである。このように今年も「戦争」や「地球温暖化」など未解決の事象が繰り返されている。人類は動物にはない人間としての「反省能力」を失ってしまったのか。

さて、この年末号では「いじめ」の問題を考えてみたいと思う。これは事象で

いけばジャニーズ問題、そして今年9月での宝塚歌劇団飛び降り自殺事件に関連する。しかし、この「いじめ」は本質的に力関係の非対称から起きることなので広く「戦争」にも関連する。

(1) いじめとは何か

いじめとは「自分より弱い者に対して、一方的に身体的・心理的攻撃を継続的に加え、相手が深刻な苦痛を感じているものと定義されている。この定義を詳しく検討すると、まず「自分より弱い者に対して」とは「加害者―被害者間」の力関係のアンバランス(非対称)とその乱用を言っている。つぎは加害者の「身体的・心理的攻撃の継続性」と被害者の「受け取り反応、感情」つまり心理状態である。つまり「いじめ」は継続性を有することから二者の関係は「親密性」が前提として存在しているのであり、そこが一般の事件とは異なる。つまり継続的な人間関係性の「病理」とも言える。

(2) いじめの発見とその時間と空間

いじめが力関係のアンバランスから起こるとされるが、歴史的にみると力関係の非対称は階級社会では固定的なものであった。奴隷社会や身分社会は「いじめ」が隠されていたと言える。それは王であれ神であれ圧倒的、絶対的な力によって抑圧されていた。人間という平等性や「尊厳」は無視というより概念さえ存在して

いなかった。その「尊厳」や「人格」といわれるものは西欧市民社会が成立してから獲得された新しい概念である。日本では江戸時代では士農工商の身分制度があり明治維新以後でさえ貴族制度は残り、また儒教に基づく男女区別は厳格に存続していた。戦後になってやっと「人権」という概念に芽生えたのである。これによって「いじめが発見されたのである。発見とはもともと存在していたものをそれと認識することである。しかし、あらゆるところで「力の非対象」は残っていた。憲法が「平等」を唱っても、社会では会社や地域、あらゆる所でそれは残存していた。しかし、何事にも外国の力に依るしか変革できない日本でも徐々に変革は進んでいった。社会から会社からそして地域共同体にと言う空間的な狭まりの順で。今や残るのは「私的空間」である。閉鎖的な個人関係や集団には「いじめ」が残存する。このように「時間||歴史」「空間||関係」ともに改善するかと思われていたが、この「私的空間」がインターネットの「仮想空間」により拡大された。新たな「いじめ」の場が作り出されたのである。

(3) 善が悪を生む

いじめは加害者が自分は「自分は絶対に正しい、正義だ」という思い込から始まる。これは非常に危険である。昨今のSNSなどでは正義感から誹謗中傷を行

う人などを見かけることもよくあり、「善」がいかに簡単に「悪」に転じるかがわかる。「善いは悪い」これは「善⇄悪」というパラドックスである。

世界のすべてを創造した神はなぜ悪を創ったのか。神が悪であるサタンを遣わしたのは人間に神の善を証明するためである。こういう話が神学にもあるほど善と悪は近い。

しかし、人間がその善を隣人愛や義務感から行うことは悪に通じると哲学者カントはいう。『人間愛や同情から善を人に施すことは「道徳的なこと」ではない。同情心や正義感が道徳的価値を持つわけではなくむしろそのような「感情」に支配されるのではなく自ら立てた「義務感」から行う行為にこそ道徳があると云うことだ。』カントは一切の権威や力、自然法則をも超えた自身の「理性的命令の声」(をすべし)という自らの法則に従えという。これがカントの実践理性の定言命法である。ここには善としての神は必要ではない。

善が積極的に悪に転ずるということを弁証法的運動として捉えたのが「啓蒙の弁証法」でのアドルノである。彼は「進歩は退化である」というテーゼを定言した。つまり私たちが「善」と思っている進歩は悪に向かっていくということだ、今日の科学文明や社会を批判した。

宝塚歌劇団のケースで見ると。上級生は下級生に劇団の規範を守らせることは

絶対善であるという使命のもとに行動している。そしてこの「進歩」が「破滅」につながるのである。

(4) いじめの構造

いじめは「いじめめる者」加害者と「いじめられる者」被害者の単純な二層構造ではない。直接手は出さないが、いじめをはやし立てたり面白がったりして見ている「観衆」、巻き込まれたくない、次のターゲットになりたくないという見て見ぬ振りをする「傍観者」が存在する。つまり「被害者」「加害者」を中心に「観衆」「傍観者」の四層構造をなしているといわれている。この理論からいじめを促進する要素は「観衆」の積極的承認と「傍観者」の暗黙的支持である。この構造のなかでは「仲裁者」が生まれにくいのが問題となっている。それはその仲裁者が時によって「被害者」になるからである。その時、元の被害者は「傍観者」となって逃避する。

誰もが「被害者」になる可能性があるというこの社会構造暴いたのがフランスの哲学者ミ・フーコーである。彼は「監獄の誕生」のなかで近代において確立した監獄制度、軍隊組織、学校制度、工場を分析し、それらに共通するディシプリン(規律・訓練)の技術と手段を見出した。まずその技術は「閉じ込め」技術閉鎖的「空間」への配分である。その空間では役割責任が課せられる。そして規則

的な「時間管理」に基づいて規格化された行動が可能になる。これによって一人の「監視者」によって多数がコントロール可能になる。

その手段は、集団における選ばれた者による「階層秩序的監視」である。「規律」の違反に対しては罰則を、遵守に対しては褒美がセットでなされる。これによって集団内で「階層秩序」が保たれる。一人の権力者が多数を支配できる技術であり構造である。

近代の権力行使を象徴的に示しているのが、功利主義の哲学者ジェレミ・ベンサムが考え出した「パノプティコン」という「一望監視施設」である。これは、監視される側からは見えない監視者によって監視される施設で、これが導入されると、従来の「見る―見られる」という双方向的な関係は、監視者による一方的監視へと変わる。こうした監視体制により、規律の機能が、逸脱の防止から技能・効用の増大へと転換し、先に見た閉鎖的管理がより幅広い管理になり、最終的には国家が細部にまで監視の目を光らせる管理社会に行き着く。

市民生活が隅々まで国家によって監視されていた時代として、私たちにとってもっとも分かりやすい例は、戦中日本の軍国主義体制である。戦後の批評家丸山眞男は軍隊組織を「抑圧の移譲」「無責任体制」と特徴づけている。抑圧移譲原理の行われている世界ではヒエラルヒーの

最下位に位置する民衆の不満はもはや移譲すべき場所がないから必然に外に向けられる。非民主主義国の民衆が狂熱的な排外主義のとりこになり易い理由でもある。そして近いものへのいじめも起きる。

現代のいじめはこのような閉鎖的自己管理組織でより起きやすい。そこはいじめが隠される。

(5) いじめの根源としての自己形成

さて、いじめというものは人間社会だけにあるものなのか。確かではないが、どうも動物の社会では少ないように思われるが集団で行動する動物にみられるような気がする。「二匹狼」などの例があるように集団から離れた動物が存在する。どうやら「集団」や「群れ」そして「社会性」と「個」というものに関係がありそうである。

自分を「個」として自覚するのは集団の中においてである。「自己が自己である」というアイデンティティは自分だけでは証明できない。

デカルトは「我思うゆえに我あり」といって、私が私であると考えることだけが絶対に確かであるという主体の確実性「自己意識」から自己存在を保証した。しかし「自我の同一性」はどうやって保障されるのが問題になる。実際に私たちの細胞は毎日入れ替わる。数年経過すれば物理的には全く別の人間になっ

ている。今の私は過去と性格が変わっているから別の人格であるから罪はないという事象に対して、イギリスの哲学者ジョン・ロックは「人格の同一性」を論じた。ロックは、生物としての人間と理性的存在としての人間を区別し、前者を人、後者を人格と呼んだ。前者の同一性が、身体の連続性によって可能になるのにたいして、後者の同一性を可能にするのは、意識や記憶の連続性である。つまり、意識が人格の同一性を作るのであり、自我は、意識に依存している。

他方、カントは、感覚を通じて外界から与えられるさまざまな情報に統一をもたらす働きとして、自我を捉えた。彼によれば、あらゆる表象には、「私が考える」という思考作用が伴い、これによつてはじめて認識が成り立つという。彼はこの働きを「統覚」と呼ぶ。

デカルトからカントまでは自己というものを集団の中の自己認識として考えた。しかし、いじめの問題で重要なのは「自己意識」が成長した後の他者との関係である。

(6) 相互承認

アイデンティティといじめの関係を考えるうえで重要なのは、自我同一性の成立を他者との関連でとらえたフィヒテとヘーゲルの議論である

フィヒテは「知識学」において、自己を端的に定立する「自我」から出発する。

彼によれば、自我はもちろん、外界の世界も含めて一切は自我によって基礎づけられる。しかし、自我にたいしては、自我でないもの（非我）が同時に反立されるという。私は、私以外の者の存在なしに、私であることはできず、私以外の者の存在を通じてはじめて私になるということである。さらに、人間同士が互いの自由を認め合いながら共存していく条件として、「相互承認」を考える。つまり、互いを「自由な人格」として認め合うことが、自由な共同体の成立要件となるのだ。

フィヒテの議論をさらに発展させ、「承認」を実践哲学（倫理学）の原理にまで高めたのがヘーゲルである。ヘーゲルの承認論は、「承認をめぐる闘争」という言葉で知られている。彼の議論の特徴は、フィヒテの承認論をホッブズの自然状態論と結びつけることで、承認過程を「闘い」と捉えた点である。

ヘーゲルが出発点にするのは、ホッブズが描いているような、徹底的に他者を排除し、自己を貫徹させようとする個人（個別的意識）である。他の対立が顕在化するのには、あるものが誰に属するかという占有物をめぐる争いである。この闘いは、一方が自己の主張を暴力的に他方に認めさせることで終結する。つまり、

主人と奴隷の関係（支配関係）が成立すること、一応の解決を見る。主人は、自らに奉仕する奴隷（自分より劣った者）

によって承認されているが、これは一方的ないし不平等な承認にすぎない。歴史的経験から明らかのように、主人と奴隷の関係は、遅かれ早かれ転覆しうる不安定な関係である。それゆえ、一方的ないし不平等な承認によつてもたらされる関係においては、支配される側はもちろん、支配する側も不自由である。なぜなら、フィヒテやヘーゲルによれば、自由な共同体の前提となる相互承認は対等な他者によつてなされる必要がある、自由とは共同体的なものであるからである。

ここで、「承認をめぐる闘争」論から、いじめ問題を考えてみると、いじめの原因あるいは背景として、相互承認の不在（もしくは一方的・不平等な承認）を挙げることができる。ヘーゲルが考えたように、人間の自己形成過程とは、元来平和的なものではなく、対立と排除をともなうプロセスである。これは個体化し社会化に付随する否定的側面である。しかし、この対立と排除が成熟した社会では暴力が許されるということの意味するのではない。理性的な人間にとっては議論、説得、納得などの平和的手段がそれに変わる相互承認の現代社会の基本生存ルールである。

さて今年度最終号は「いじめ」の哲学で幕を閉じる。本論でも述べてようにいじめは「閉鎖社会」の問題であり、私的な関係で起こるとされている。しかし、

近年ではイスラエル・パレスチナ問題にみられるように、そしてウクライナでも、それは決して閉鎖的な空間で行われるのではない。力関係の非対称性は圧倒的であるがそれが行使されるのは世界という広い場であり閉鎖空間ではない。その空間を広げているのはインターネットの世界でもある。それはヴァーチャルリアリティであり、非現実空間での現実である。そこでの自己はもはや現実の自己ではなくなっている。そこに「相互承認」は成立するのか。「リアル」が試されている。

大峯奥駈道 (73)

体験型人間学 23

下村 嘉明

最近、他の警備会社の応援に行くことが多い。営業が上手い会社が仕事を取り過ぎて、私の会社へ応援を要請してくるのだ。応援で行く現場は、比較的やりやすく早く終わるところもある。人員も適度な数を受注しているから有難い。もちろん期待外れの厳しい現場もある。

11月に行った現場は、家から近い猪名川にかかる橋の工事現場だった。私の会社から2名、他の警備会社から2名、元受け会社から2名、総勢6名の警備員

で橋の塗装工事の工事車両を橋の真ん中に停車するから、一車線の片側だけで交通誘導する片側通行である。依頼会社のリーダーが私に「片側通行」できますかと、聞いたので「できます」と答えたなら、二人です誘導のひとりになって、会いは初めて出会った警備会社の人だった。

小柄で身軽に動き、なれた様子でテキパキと誘導灯を動かして車を誘導する。私は、上手い人だと感心しながら、橋の上で身振り手振りを交えながら、誘導灯を振る。この橋は、工業団地をから出てくる大型車や市バスなど大きな車がひっきりなしで走っている。しっかりとした合図を車のドライバーに見えるように送らなければ、車は止まってはくれない。たまに、無視して走っていく車もあるが、基本的に、無視して走っていく車もあるが、基本的に、どのドライバーも私たちの指示に従ってくれる。

休憩時間に、相方の人と話をすると、78歳と言う。警備歴は20年、この現場は5年間、この時期に来ているという。やっぱり慣れてるんだと、思いながら、いろいろと話をした。もう二度と会わないかもしれないか、大変盛り上がった。特に、彼が熱烈な阪神ファンで日本一になった翌日だったので、スポーツ新聞を5紙買ってきていて私も読ませて頂き更に話が盛り上がった。やっぱり、大手の会社じゃないので、ひどい現場がある。うちもそうです。ほんとに呆れるような現場がありますね、と

私は答える。彼の言う事は、現場を知っている人でないと分からない事ばかりで、実に楽しい時間だった。彼のような人が工事現場の安全を守っているのだと、思った。

新型コロナウイルス禍愚考

(その39)

明石 幸次郎

先月に引き続き、幸福とは幸せとは何かに付いて愚考しています。

ある高名な哲学者は「生きていく限り、この問いに向き合い続けなければならぬ問いであり、その問いに応えることは、容易ではない」と難解なことを言っていますが、日々のこれを問い続けなければ、幸福、幸せになれないかと考えると、いささかしんどく感じます。

この哲学者に比べ、幸福論を書いた哲学者アランが言った「幸せになるための努力は決して無駄になることはない。与えられるのを待っているのではなく自分から積極的に行動すること、それが幸福への道である」との言われた方が分かり易いと思います。

それでは、アランが言う、幸せになる

努力とは何か？ 人一倍の努力を重ね、人を押し退け高い地位を得、権力をも得る、それに伴う高い収入を得ることで、金銭欲、物欲、名誉欲、支配欲などを満たせば、幸福になれるのか？

しかし、このような“地位財”は長くは、続かないと言われてます。政治家、大会社の社長、会長。その他の業界でのトップも死ぬまで地位財は持ち続け幸せを得ることは出来ません。

他方の長続きする幸せは“非地位財”で、その多くは心的な要因による幸せです。

その心的な要因は他者と比べた地位として測れないし、直観的に幸せに繋がっていると実感しにくいもので、だから、目指しにくいのですが――。

その目指しにくい長続きする幸せの要因とは「自己実現と成長」「つながりと感謝」「前向きと楽観」「独立とマイペース」と多くの人からアンケートを取り、コンピューターで要因分析した結果がこの4つの要因のようであります。

① 「自己実現と成長」とは、自分の強みがあるか、その強みを社会で活かしているか、そんな自分になりたかった自分であるかどうか、より良い自分になるために努力をしてきたかどうか。

② 「つながりと感謝」とは、人を喜ばせる、その顔がみたい。私を大切に思ってくれる人達がいるし、自分も

そう思っている人達がいる。人生で感謝することが沢山ある。他人に親切にして、手助けをしたいと思っ

③ 「前向きと楽観」とは、何とかなると思える楽観性。気持ちの切り替えが出来る。失敗しても引きずらない。積極的な他者との関係。自己受容(まあ、そこそこやってきた自分をエエかなあと思える)

④ 「独立とマイペース」とは、あなたらしく！と言う事です。社会的比較志向の無さ(自分のすること、状況を他者とあまり比較しないこと。自己実現は他者との比較ではなしに、自分との戦いであるべきである。他者と仲良くするのは良いが人に合わせてばかりでは幸せにはなれない。自分らしさも持ちながら「和して同せず」です。

幸せになる鍵はこの4つの要因にあるようです。その要因を持ちそれを維持して少しでも高める努力を続ける過程が、幸せを長く感じられることに繋がるのでしょうか？

最後に車椅子の詩人“おぞねとしこ”の詩を挙げて、これを自分と他者に捧げたいと思います。

さあ涙をふいて あなたが花におなりなさい
あなたの花を咲かせなさい
探しても探しても あなたの望む花がないなら
自分がそれにおなりなさい

さあ涙をふいて あなたが花におなりなさい あなたの花を咲かせなさい 探しても探しても あなたの望む花がないなら 自分がそれにおなりなさいでは、幸せな良き年をお迎えください！

オクラの山たより (87)

困了生

一

小林一茶が活動した文化から文政(1804年～1829年)にかけての俳壇の特徴は平板でわかりやすいことです。しかし、芭蕉がめざしたような精神の高さがなく、苦しいことから逃げ出していくような精神が目立ち蕪村にはあつた雅さがない、といえるでしょう。いや、むしろ文化・文政期の人たちは低い精神へと逃避したのだと多くの近世文学研究者はいつています。それはこの時期に生まれた『浮世風呂』(1809年)『浮世床』(1811年)『東海道中膝栗毛』(1821年)を見れば分かりますが、誰にも分かり、おもしろく、しばらくいやな世間を忘れられます。しかし、そこには人の精神を高めていくようなものではありません。

寛政の改革以後、幕府の管理体制は厳

しくなり、思うまま自由にものを書くことは抑圧されて、思ったことを正面からいわないのが安全だとする卑屈な心理が社会全体に広まってしまいました。裏へまわつてちよいとカラシをきかせた皮肉をいうといった芸がよいと意識されました。体制側からにらまれない場所ではかげた滑稽にふざけること、それが民衆に許された唯一の精神的な自由なのでした。この時期に狂歌や川柳が流行していくのはこうした事情と無縁ではありません。当然、俳諧もそうした逃避精神ともいえるものに引きずられて蕪村ら天明期の俳人たちがめざした理想から文化・文政期の俳人たちは遠ざかっていきました。

その時代にあつて群を抜いた存在が小林一茶と夏目成美でした。夏目成美は小林一茶の話をする上で無視することのできない存在です。

今回はその夏目成美について、そして成美と一茶の関わりについて少しばかりふれてみます。

夏目成美(1749～1817)は当時の江戸の俳壇を代表する俳人であり本名の井筒屋八郎右衛門で蔵前に札差の店を出している富裕な商人でもありました。その成美の作品を何句か紹介します。

① 撫子(なでしこ)の節ぶしにさす

夕陽かな

② のちの月葡萄の核(こゑ)のくもりかな

③ はや秋の柳をすかす 朝陽(あさひ)かな

④ ふはと脱ぐ羽織も月の光かな

⑤ 魚(う)を食うて口腥(なまぐさ)し 昼の雪

①の句は撫子のほっそりとした茎にさす夕陽。美しい斜陽の光に節々が際だつて見える。小さい節にだけ視点を集中して作者の繊細な感覚を感じさせます。②

の句の「のちの月」とは旧暦九月十三日の月のこと。名残の月ともいわれ満月の二日前の少し欠けた月をこの年の最後の月として愛でました。その月の光が葡萄のみの中にある種子を透かし見せています。これもかなり繊細な句です。③と④の句はともに繊細な光をとらえた秀句です。⑤の句は清らかな雪景色と生臭いものを口にした自分の不浄さとの対比という自己の戯画化の句でしょうが、「昼」に注目すると生臭い商いをする昼の自分と「美」を感じ取れる俳人としての自分とがいて、それこそが本当の自分だといっているような句にも感じられます。①

から③の句はいずれも品の良い作品で俳人夏目成美の力量をよく示すものです。

⑥ 蠅(は)打ちてつくさんと思ふ心かな

⑦ 明月を追うてひけひけ庭むしろ

実をいうと成美は痛風を悪化させて足の病に苦しみ不自由していました。⑥の句には足の病にいらだつている成美の気持ちがよく出ています。⑦の句は歩行ができなくなつてからの句です。あきらめの気持ちにもじませた哀切感ただよう句です。

⑧ 夏と秋ふたつにわりし西瓜かな
⑨ 稲妻や人のあゆみもおそいもの
⑩ 雨見ゆるそれさへ月の力かな

しかし、先ほど述べた大衆化の波は成美にも押し寄せていて、研究者によれば成美の句は全体としてみれば、こうした大衆に迎合したような句が多いとされます。⑧から⑩の句はその例です。確かに俗っぽさが目立ちます。当時の江戸で俳諧の雄であり続けるにはこうした傾向は仕方のないことであつたのでしょう。

二

この成美の手厚い庇護を江戸放浪の時代の後半で一茶が受けていたことはよく知られている事実です。一八〇二(享和二年)に一茶と親しく交流して以来、成美は終始一貫して一茶の暮しの庇護者でありました。逆に、成美が江戸の俳人中で隠然たる実力者と目されていたことで、江戸で俳諧師として独り立ちしようとしていた一茶が決して失つてはいけな

い手づるだったのです。

一茶は足しげく成美の家に出入りし朝晩の食事をこ馳走になったり、一晚泊めでもらったり、時には「南一片成美に賜ふ」と「文化句帖」（文化元年から五年までの一茶が記した句稿、自作の句のメモの傍らにいろいろな出来事も記されている）に書いてあるほどの厄介になっていました。「南一片」とは南鐔二朱銀のことで二朱は一両の八分の一です。もつとも一方的にめぐんでもらっていたわけではなく、成美の主催する句会（随齋会）にはいつも出席していましたし、成美と両吟を試みたりしてもいました。単なる師弟の間柄というよりも俳友とでもいべき関係だったといえます。

しかし、このよき間柄もある日の出来事で突然おかしくなります。井上ひさしさんが戯曲「小林一茶」でもとりあげた成美邸で起きた金子紛失事件です。ある朝、成美が金箱を改めたところ、そこにあるべき金子（きんす）がなくなっていました。

テ他出スルヲ許サレズ。

- 四 晴 大イニ捜ス
- 五 晴 大イニ捜ス
- 六 晴 大イニ捜ス 主人本屋ニ入ル
- 七 晴 金出デズ
- 八 晴 金子未ダ出デザレドモ其ノ罪ユルスト。

十一月二日に一茶は成美の家で留守番をしていました。金子紛失事件が起きたのはその夜のことだとされて、他の留守番をしていた奉公人たちと一緒に一茶も泥棒だと疑われたのです。足止めをされて成美の主催する随齋会にも参加できませんでした。「我モ彼ノ党ニタグヘラレテ」という言葉には一茶の「俳友と違っていた成美に他の奉公人と同じ仲間でコソ泥をしかねない人間だと疑われた」という辛い悔しい思いがにじんんでいます。また、同時に「自分はこれからどうなるのか」という恐れの気持ちもうかがえそうでした。

夏目成美は俳人であると同時にやり手の商人であり、これに対して江戸において一茶は俳諧しか能のない生活弱者でした。成美は富裕な階層に属する人間として、やはり、突き放した冷静な目で一茶を見ていたのではないのか、俳諧を解する居候ぐらいにしか一茶を考えていなかったのではないか、そんな想像が「我モ彼ノ党ニタグヘラレテ」の言葉からでき

ます。成美邸の台所の冷たい板の間で朝ご飯食べている一茶、奉公人が寝起きしている部屋の片隅で背を丸めて寝ている一茶の姿が見えてきます。俳友とはいえ貧富の格差をしっかりと意識させられるような関係であったのでしょうか。

ここで一つ疑問が生じます。この金子紛失事件が起きる二年前の文化五年に亡き父の遺産分配に一定の決着が付いていました。それによって柏原宿で中の上ぐらいの田畑を持った戸主としての身分を一茶は確立していました。その田畑から上がってくる一茶の収入は多いとはいえませんが、決して貧窮ということではありませんでした。小地主としての収入がそれなりにあったことを一茶は成美に伝えていたでしょうか。たぶん、金子紛失事件での成美の一茶への扱いを見る限り、伝えてはいなかったらうと思えます。それなりの資産と身分を持ったことを知っていれば成美もいわば無宿人同然に一茶を扱うことはなかったでしょうから。

では、なぜ、一茶はそれを伝えなかったのか。一茶なりの戦略があったからだと筆者は想像します。江戸の俳壇で名をあげることにまだ未練を持っていた一茶は自分にはいつでも帰郷できる状況にあることを成美に話せば自分にはそれが不利にはたらくと考えたのではないか。故郷を失った一茶は成美に頼って江戸で俳諧師として大成していくほかはない人間なのだ成美に信じさせる方が自分にと

ってはいいいという打算が一茶に働いていたと思うのです。恵まれない人生を歩んできた一茶が身につけたしたたかさです。

この事件のとき四十八歳であった一茶は失われたお金を泥棒と疑われながらも成美のために三日も四日も捜し続けます。一茶にとって成美という存在は、たかが泥棒と疑われたぐらいでは失うことができない江戸俳壇との貴重なつながりだったのです。

こうしたつながりが功を奏したのかどうか。あくる一八一（文化八）年発行の俳人番付「正風俳諧名家角力（すもう組）で東の方八枚目に一茶の名前が載りました。江戸在住俳人としては第三位の高位でした。

同じ話の繰り返しになりますが、文化六年元旦の句に次の作品があります。

- ⑪ 元日や我のみならぬ巢なし鳥
- ⑫ 礎（いしづえ）や元日しまの

巢なし鳥

- ⑬ 家なしの此の身も春に逢ふ日哉

この年の元日の夜、江戸佐内町で出火し、本所表町あたりまで焼いた大火がありました。「我のみならぬ巢なし鳥」とは帰郷していた間に江戸の家を失い成美邸に厄介になっていた自分だけではなく多くの人が巢のない鳥と同じく家を持ったことをいっています。この三句の後で一茶

は「随齋のもとにありて乞食客一茶 述」と記しています。一茶は自らを「乞食客」と卑下しています。この表現には成美に哀れな自分の境涯を訴えたい一茶の気持ちがあります。同時に一茶の複雑な気持ちも読み取れそうです。

三

さて、夏目成美が一茶の句の後に「屋越する癖も直らず四十まで」と付けたり「日本紀をひねくり廻す癖ありて」と付けたりしたことはよく知られたことです。どちらとも一茶のことです。「屋越」とは家の引越しのことです。江戸にいるあいだ一茶はひっきりなしに引越しをしていました。「日本紀」とは「日本書紀」のこと。成美は一茶の蔵書に日本書紀が多くあるのを知っていたのでしょう。「四十まで」とか「ひねくり廻す」という言葉には都市インテリである成美の軽い皮肉を感じられます。

⑭ いざ去(い)なん江戸は涼みも

むつかしき

この句を詠んで一茶は一八二二(文化九)年十一月半ばに故郷に永住する覚悟をして柏原に帰ります。もはや人がいっばいで騒がしく夕涼みも難しい江戸はもういやだと句の上ではいつているのですが、一茶はすぐに江戸を捨てたのを後悔

して、その冬にできた句の批評を成美に求めています。その依頼の手紙で一茶は「辺地に引き込み候へば、彼の流行とやらんにおくれはせぬかと、そのみ用心つかまつり候」と書いています。まだ江戸の俳壇には未練たつぷりであったのです。その作品への成美の批評は「日本中ひつくるめて名人名人」と一度は持ち上げ、其の後で次のように書いています。

情がこはくて一ツ風流だから、切り落としてでは請けとらぬ。

「情がこはい」とは「強情、アクが強い」ということで、「一ツ風流(いっぶふうりゅう)」とは「普通とは変わった流儀」とか「常人とは異なった言動をする人」とかいう意味です。また、「切り落とし」とは目の肥えた常連がすわる芝居小屋の平土間、つまり最前列の見物席のことで、ここでは俳諧に対して優れた鑑賞眼を持った玄人のことを指しているのでしょう。「請け取らぬ」とは優れた作品とは認めない、という意味です。

このことから見ると成美の一茶についての人物評は、一茶は強情者でアクが強い人であり、その作品は普通とは異なった一茶独自のもので当世の江戸俳壇では高い評価は得られないだろう、という内容になります。一茶の人柄とその作品を成美はよく見ていたといえます。実をいえば成美はこのあと一句ごとに

批評をして最後に「君が句はみな一作あり、予がごとき不才は其の所に心至らず、(一茶の句は)いはば活句といふべし。

予、人に似せんとはせず、ただ其の愚を守るばかりなり。愚作のごときはまだるき様におぼしめすならん。愧(はず)べし、愧(はず)べし」と書いています。「活句」と

「言外に奥深い意味のある言葉」ということです。一茶の作品を「活句」であることと持ち上げ、自分の作品はきつと齒がゆい句だと思っておられるのでしようと述べる成美はあくまで温厚な長者という姿勢を崩してはいません。しかし、その温厚さの中に先ほどみた辛辣なトゲを含んでいたことは記憶していいことです。

成美は「予、人に似せんとはせず、ただ其の愚を守るばかりなり」という言葉のとおり、交わる俳友は数多くいましたが、師を求めることなく、結社に拠らず、つねに江戸の俳壇から数歩退いた位置にいました。孤高の俳人であったといえます。「情がこはくて一ツ風流」の俳人であった一茶も孤独感を絶えず感じていた人であったでしょうから、孤高の俳人成美に心ひかれたのも無理ないことなのでした。

夏目成美は一茶が故郷の柏原に帰って四年後の一八一六(文化十三年)年に死歿しています。このとき一茶は江戸近くにおり下総を旅行中でした。成美の死を一茶は「七番日記」で次のように記しています。

九 晴寒、寅ノ五刻ニ入ル

疝氣ノ虫下ル

布川ニ入ル

成美歿ス

一茶の日記はメモのようなものですが、事柄によってはかなり詳しい書き込みがされます。しかし、成美の死に関する記述はこれだけで驚くほど素っ気ないものです。一茶はこのあと成美の追悼句会にも参加し、句会以外でも成美の死を悼む句を作りますが、その句は次のようなおざなりな句で一茶が成美の死を悼む気持ちはほとんど感じられません。随齋とは成美の俳号です。

随齋旧述

⑮ 霜枯れや米くれるとて鳴く雀

⑯ 霜枯れにとろとろセイビ参り哉

「七番日記 文化十三年十二月の記事

成美は一茶にとつてずっと一貫して自分の上にいる存在であり、その交わりは心をお互いに開いた真の友人どうしのそれではなく、かなり複雑なものであったと考えられます。また、確かに江戸在住の間、一茶は俳諧の芸の向上のために成美に親近したただけではなく、成美を江戸俳壇にしっかりと地位を得るための有力な手がかりと考えていたのは間違いありません。とはいえ、成美が亡くなったと

き、一茶はすでに妻をもらって故郷に定住していました。すでに江戸の成美は一茶にとって遠い存在になっていたのでしょうか。

「成美歿ス」という素っ気ない言葉の後にある一茶の思いは気になりますが、それを知るすべはありません。

四

最後に成美邸で金子紛失事件が起きた文化七年十一月から一ヶ月後に一茶が懇意にしていた西林寺(茨城県守谷市)にあり住職は俳号を鶴老といって全国敵に有名な俳人だった)での句会で一茶が書いた挨拶の文章があります。この時期の一茶の俳句観がよくわかる文章であり、自ら作者名を「しなのの乞食首領一茶」としているのも面白いのでここで紹介します。長い文章なので抄録とします。

一茶は「清らかな水が湧き出る井戸でも水をくみ取り続けなければ井戸の水が悪くなって人知れぬ埋もれ井戸となる」と述べた上で次のように書いています。

(俳諧の道を) 志すも又さの通り、
おりおり魂の黴(かび)を洗ひ、つとめて心の古みを汲(く)み干(ほ)さざれば、かの腐れ俳諧となりて、はては大きへも食らはずなりぬべき。…
中略：
(そして、この春から俳諧をしてみ

ようという人は) 相かまへて、其の場逃れの正月言葉など、必ず、のたまふみじきものなり。」とは「十分に気をつけて、たてまえやお世辞など飾り立てた言葉をおっしゃってはいけません」という意味です。

「相かまへて、其の場逃れの正月言葉必ず、のたまふみじきものなり」とは「十分に気をつけて、たてまえやお世辞など飾り立てた言葉をおっしゃってはいけません」という意味です。

ここで一茶が言おうとしているのは二つのことです。一つは俳句に向かおうとするにあたっては常に新鮮な心でいなさい、ということ。もう一つは言葉に飾りはいらぬ、あるがままであれ、ということ。

正岡子規が一茶の特徴を「主として滑稽、風刺、慈愛の三点にあり」として以来、一茶の句は子ども向けで深みがない、という偏見がずっとありますが、この一茶自身が語る俳句観を見ると彼の句が今も読む人をひきつける理由が分かるように思えます。

隠された歴史(62)

満田 正賢

前回と前々回、日本書紀に隠された王朝交代の話をしました。そして、王朝交代の中心にいたのは、日本書紀には古人大兄王の娘であると記され、実際には九州王朝の天子であった、そして、白村江の敗戦の後、天智天皇の皇后となった倭

姫王(*「やまとひめ」)「わのひめおう」とも読める)であると推定しました。

そして倭姫王が天皇であったとする喜田貞吉氏の説を紹介しました。今回は、この喜田氏の説を中心に、倭姫王がどのような形で各種文献に残されているかについて掘り下げてみたいと思います。

まず、喜田氏の『中天皇考』の結論は次のようなものです。

- ① 称徳天皇の宣命中に中天皇の語あり。元明天皇を指す。
- ② 天平十九年言上大安寺縁起に仲天皇の語あり。天智天皇の皇后倭姫女王を指す。
- ③ 倭姫女王は天智天皇の崩後一時天皇の位により給ひ、後より太后天皇と称せられ給ひし御方なり。
- ④ 然らば即ち万葉集の杳明朝なる中皇命はナカツスメラミコトにして、中天皇の義なるべく、倭姫皇后を指し奉れるものなるべし。
- ⑤ 正倉院御物象牙牌及び献物帳に中太上天皇の御名あり。共に元明太上天皇の御名なり。
- ⑥ 中天皇とは先帝と後帝との中間を取りつぐ中間天皇の義か。若しくは中宮天皇の略称なるべし。
- ⑦ 然らば即ち万葉集中の舒明天皇朝に於ける中皇命は、皇極天

皇の御事なるべし。
喜田氏は、続日本紀神護景雲二年十月の宣命から考察を始めています。

「掛けましも畏き新城(にいき)の大宮に天下治め給ひし中つ天皇の臣等を召して後の御命に勅(の)りたまひしく、汝達を召しつる事は、朝廷に侍(つか)へまつらん状(さま) 教へたまはんとぞ召しつる。おだひに侍(はべ)りて、諸聞こしめさせ、ただしく明かに浄き心をもちて、朕が子天皇に侍(つか)へ奉り、護り助け奉れ。つぎては是の太子を助け侍へまつれ。・・・」

これは称徳天皇の宣命(せんみょう)ですが、この宣命の中に出てくる「中つ天皇」を、本居宣長が、平城京に宮を建てた元明天皇とその孫で称徳天皇の父親である聖武天皇の中間で天皇となった元正天皇(*元明天皇の娘で聖武天皇の父である文武天皇の姉)であると解釈したのに対して、喜田氏は「中つ天皇」は元明天皇そのものであり、「中つ天皇」とは「中間天皇」とも「中宮天皇」とも解釈できるが、男系の系譜の繋ぎ役となった女性天皇であると解釈しました。
次に喜田氏は、大安寺縁起の考察に進みます。天平十九年大安寺三綱言上の伽藍縁起流記資財帳には、大安寺の由来が記されており、この寺が聖徳太子によって基を開かれ、代々の天皇付託を受けて

斉明天皇に及び、尚完成せざることを述べた後で、次のように記しています。

「(斉明) 天皇筑紫朝倉宮に行軍し、まさに崩じたまはんとする時、甚(いた)く痛み憂ひ勅りたまはく、此寺を誰かにか授けて参集(まいれ)ると先帝の待ち問いひたまはば、いかか答え申さんと憂ひたまひき。時に近江宮御宇天皇奏したまはく、(中略) 仲天皇奏したまはく、妾も我妹と、炊女として造り奉らんと奉しき。時に手を拍ち慶びたまひて、崩じたまひき」

喜田氏は、近江宮御宇天皇(天智)を我妹(*夫と同じ)と言ひ、自らを「妾」と言ひ、炊女になつても大安寺を造り奉らんと斉明天皇に対して請け合う「仲天皇」は天智天皇の妻となる倭姫王しかいないと考察しました。

ところが、日本書紀を見る限り、倭姫王は天皇にはなつていません。喜田氏はこの問題に対し、大海人皇子が皇位継承者を辞退した際に、「天皇が崩御された際には、皇后が即位して大友の皇子を皇太子につけるべき」と進言したと日本書紀が記していることを受けて、皇后(倭姫王)が実際には繋ぎの天皇として即位していたのではないかと推定しました。そして懐風藻の智蔵伝の

中にその証拠を見つけました。

「智蔵は、俗姓禾田(あわた)氏、淡海帝の世唐国に遣学す。(中略) 太后天皇の世、師本朝に向かふ。同伴陸に登り、経書を曝涼す。(中略) 衆皆嘲笑り(あざけり)妖言と以為(おも)へり。試業に臨み、座に昇りて敷演す。辭義峻遠、音詩雅麗。(中略) 皆屈服し驚駭(きょうがい)せずといふこと莫し。帝嘉(よ)みしたまひ、僧正に拜したまふ。」

喜田氏は天武二年に智蔵が僧正に任せられたと『相綱補任』に記されていることから、「太后天皇」は天智と天武の間の天皇である、即ち倭姫王が天皇になった証拠である、と考察しました。そして、倭姫王が天皇であつたということが証明されたとして、万葉集にある「中皇命(なかつすめらみこと)の考察に進みます。

万葉集第一巻には、二か所「中皇命」が出てきます。第一は舒明朝の間人連老(はしひとのむらじおゆ)の歌につけられた題詞「天皇の内野に遊獵した時に、中皇命の間人連老をして献らしめし歌」という記述です。

*万葉集三番歌

「やすみししわが大君の朝(あした)には取り撫でたまひ夕(ゆうべ)にはい寄り立たししみとらしの梓の弓のなか弭

(はず)の音すなり朝狩りに今立たすらし夕狩りに今立たすらしみとらしの梓の弓のなかはずの音すなり」

「八隅知之我大王乃朝廷取撫賜夕庭伊縁立之御執乃梓弓乃奈加弭乃音為奈利朝狩尔今立須良思暮狩尔今他田渚良之御執能梓弓之奈加弭乃音為奈里」

喜田氏はこの中皇命を皇極天皇と理解しました。しかし、第二の斉明(*皇極の重祚)朝の「中皇命の紀伊の温泉に住きたまひし時の御歌」については、中皇命の歌の内容から倭姫王以外にはありえないとします。

*万葉集十番歌

「君がよも我がよも知らむ磐代の岡の草根をいざ結びてな」

*万葉集十一番歌

「吾がせこは借廬作らす草なくは小松が下の草を茹らさね」

*万葉集十二番歌

「わが欲(ほ)りし野島は見せつ底深き阿胡根(あごね)の浦の珠そ拾はぬ」

これは斉明天皇(皇極天皇の重祚)が紀伊の温泉に行ったという日本書紀の記述に合致したものです。従来、孝徳天皇の皇后で斉明天皇の娘(中大兄皇子の同母妹)である間人皇女(中皇女)であるとしていましたが、「吾がせこ」を亡くな

った孝徳天皇とみなすのはおかしい。斉明天皇の紀伊温泉行に同行していた中大兄皇子(天智)と考えるのが自然である。

又、皇命(すめらみこと)は皇女ではなく天皇となった人物を表している、すなわちここに出てくる中皇命は倭姫王であると喜田氏は主張しました。

話は変わって、正倉院御物象牙牌に「平城御宇中太上天皇惟心持経」という銘があります。又、東大寺献物帳に「天武天皇より持統天皇に伝え給ひし厨子一口、天皇之を藤原宮御宇大行天皇に伝え、大行天皇之を平城京御宇中太上天皇に伝え、後太上天皇之を今上に賜ひ、今上謹んで献ずといふなり。」という銘があります。

喜田氏は、大行天皇が文武天皇、今上が孝謙天皇、後太上天皇が聖武天皇であることは間違いないとし、平城京御宇中太上天皇は、文武天皇の母である元明天皇であると断じています。

そこから喜田氏は、「中天皇とは先帝と後帝との中間を取りつぐ中間天皇の義か。若しくは中宮天皇の略称なるべし。」という結論を引き出し、古来、雄略天皇の子の清寧天皇と、履中天皇の二人の孫(顕宗天皇・仁賢天皇)の繋ぎ役として政治を執つたと日本書紀記す飯豊天皇に始まり、推古、皇極、斉明、倭姫、持統、元明、元正といずれも(男系の)先帝と後帝との間を取りつぐ、中間の天皇であると結論付けました。

しかし一方で、喜田氏は、河内の野中

寺所蔵の仏像銘に「中宮天皇大御身勞坐之時、誓願之奉彌勒御像也」という文があり、丙寅年（天智五年）四月、「開」と理解する）の記になることから、これは斉明天皇であると理解し、自分の母親を中宮と呼ぶのは解せないが必ずしも不可ではないとします。

ここまででは喜田貞吉氏の論文『中天皇考』の紹介ですが、これに対し私の考察を述べます。

まず、喜田氏が懐風藻の智蔵伝に記された「太后天皇」が、天智の後即位した倭姫王であると考察したのは、すばらしい着眼であったと考えます。しかし、喜田氏は、倭姫王が天皇であったことを日本書紀がなぜ隠したのかという考察に及んでいません。日本書紀は事実を記していないということであれば、倭姫王が天智と天武の間の繋ぎ役の天皇であったという断定もできないはずです。

智蔵伝をよく見ると、智蔵が「太后天皇の世、師本朝に向かふ」という文章に、「帝嘉（よ）みしたまひ、僧正に拝したまふ。」という文章が続いています。これを文面通り読めば、「帝」とは智蔵が帰国報告した時の天皇、すなわち「太后天皇」になります。喜田氏は、『相綱補任』の記述を根拠にして「帝」は天武天皇のことだと理解していますが、『相綱補任』

には、永治二年（一一四二）に僧綱に補任された僧の名前も記されており、平安後期の感覚で、元資料に記されていた干支を天武二年と記したものと思われます。即ち前回・前々回考察したように、実際には天武は天子とならず、倭姫王を天子として奉っていたことの証拠になるのではないかと思われまます。

次に万葉集の中皇命についてです。この解釈には、私が「隠された歴史（10）」で紹介した、古田武彦氏の万葉集に関する考察が重要な視点となります。万葉集に収められている柿本人麻呂の歌を始めとした古歌には、説明書きと合わない内容が歌われているものが多くあります。一方で白村江の戦いの前には斉明天皇も中大兄皇子も大海人皇子も皆九州に移動しているにも拘わらず、九州の人々の歌も白村江の敗戦の悲劇を歌った歌も一切ありません。古田氏は万葉集に収められた一つ一つの歌の内容を吟味し、多くの歌は九州で作られた歌ではないか、それにあたかも大和で作られた歌であるかのような説明文を加えたのではないかと考察しました。この考察は非常に優れた考察であると私は考えています。

古田氏は、『古代史の十字路―万葉批判』で、全二十巻約四五〇〇首が収められている万葉集の第一巻の三番目の歌と十番・十一番・十二番の歌の題詞（説明書き）に出てくる「中皇命」という言葉に注目しました。そして「中皇命」とは九

州王朝の天子であり、「中」とは博多を流れる那珂川（なががわ）などに共通する固有名詞である、そして題詞の内容は全く歌の内容とかけ離れたものであると考察しました。三番歌にある「朝には」という文は原文では「朝廷」と書かれていることなどから、実際には朝廷賛美の歌であると、歌の意味を読み取っています。

ただ古田氏は、中皇命＝間人皇女（中皇女）説を否定して、中皇命は男性の九州王朝の天子であると考察しています。そして、十一番歌「吾がせこは借廬作らす草なくは小松が下の草を荏らさね」という歌は、中皇命の妻がうたった歌であると解釈しています。しかし、十一番歌・十二番歌・十三番歌とも作者は共通であり、中皇命自身が女性であると考える方が自然だと思われまます。

私は、倭姫王を、「日本書紀に斉明天皇として記された九州王朝の天子」の皇女で倭国王を継いだ人物であると考察しました。倭姫王は白村江の敗戦の時には九州にいて、唐軍の九州上陸を恐れ、た倭姫王は戦地に赴かなかった中大兄（天智）に庇護を求めて、近江に移り、そこで天智と婚姻して天智に倭国（九州王朝）の政治を委ねたと考えます。そのように考えれば、「中皇命」が九州王朝の女王であった倭姫王であったという考察は成り立ちます。

又、野中寺仏像銘にある中宮天皇の解

釈についても、天智が自らの皇后となった倭姫王に敬意を表して「中宮天皇」と呼んだと考えればつじつまはあいます。

最後に、もう一度喜田氏の考察に立ち返ってみます。田中卓氏などは、倭姫王天皇説を是とせず、また万葉集第一巻にでてくる舒明朝と斉明朝の「中皇命」を別人とする喜田氏の考察を不服として、仲天皇・中皇命を天智の同母妹の間人皇女と論じています。しかし、倭姫王を「日本書紀に斉明天皇として記された九州王朝の天子」の皇女で倭国王を継いだ人物と捉えれば、矛盾は解消します。「中皇命」は倭姫王をさす固有名詞であり、壬申の乱以降天武によって倭国（日本国）天子に復帰させられ、「中天皇」、「太后天皇」と呼ばれていたと考えます。但し、のちに元明天皇も中天皇・中太上天皇と呼ばれた可能性はあると考えます。

「道をゆく」四六

成瀬和之

「女芭蕉の心意気 桑原久子の旅日記から」一四 女性の旅日記への流れ

①前田椒について

日本女性文学史の全盛期が平安時代

であった、ということ常識になっています。紫式部の『源氏物語』、清少納言の『枕草子』がすぐに思い浮かぶでしょう。日本だけでなく世界的に見ても最高峰だったのも知れません。

鎌倉、室町と時代が下るにつれて、女性の作品は文学史の上から次第に姿を消していきます。フリードリヒ・エンゲルスは『家族、私有財産および国家の起源』で「母権制の転覆は女性の世界的な敗北であった。」と書きました。歴史学者の家永三郎は、『日本文化史』8岩波新書で、「室町時代以来進行しつつあった女性の地位の下落は、嫁入婚が原則となった江戸時代にはいつてその極に達している。」とし、嫁入婚の本格化した室町時代の始まりに一つの画期を求めています。

そして、江戸時代には限られた女性以外はあまり文芸的な生活をしなくなったというのが、最近までの一般的な見方でした。家父長制のもと「幼少時には親に従い、結婚後は夫に従い、老いては子に従う」という「三従の教え」が説かれました。

前田俣(またよし 一九二二〜二〇二〇)は、福岡市に生まれの福岡女学院短期大学教授で、近世の女性旅日記などの近世女性文学が専門でした。

前田俣は、一九五〇年代の半ば頃から、江戸時代の地方の女性たちが書き遺した作品とその生涯に光りをあてたいと思います。次のように述懐しています。

これからの日本文学史の新しいテーマは、地方であり、女性であり、庶民の作品

であるという考えは、その頃の私をとらえてはなさなかった。しかし、こうした仕事は足で歩かなければ資料は見つからない。時間を作っては各地を旅したかつての日々が思い出される。

前田俣が近世の女性たちの文芸活動を調査していくうちに、特に江戸後期になると、地方の女性たちも、古典を学び、和歌や俳諧に親しみ、文章を書く人たちが少しずつ増加し、支配層だけでなく庶民の間でもその数を増やすようになることがわかってきます。その理由の一つに、各地の国学者たちの活動があげられます。彼らは当時著名な国学者の門弟であった者が多いが、一定期間、師の許で勉強したのち、やがてそれぞれの地方で塾を開き、門人を集めて地域の人々の教育に携わりました。その一例が、桑原久子さんや小田宅子さんの師、伊藤常足です。その門人となることよって、彼女らは、古典を詠み、和歌を作り、旅に出では日記を書き遺すだけの教養を身につけることができたのです。

女性が旅日記を書くことは、江戸時代以前にはかなり限られていました。ところが、江戸時代も後半になると、庶民たちの旅が盛んになるにつれて、女性の旅

も多くなってきたようで、一般の女性たちもまた旅日記を書くようになります。女性史を研究している芝桂子氏の調査によれば、二〇〇〇年ごろの時点で既に約一五〇編が発見されています。

五〇代の旅が最も多く、四〇編以上を占めます。子育てを終わり、家督を譲った後の旅であることを示しています。しかしその生活を詳細に見ると、大半は若い頃に夫を亡くし、女手一つで家を守り、子どもを育てあげた女性たちであったことがわかります。親から譲られた財産や、夫の庇護のもとに安穏な家庭生活を送っていた人たちがほとんど見あたらないことは注目すべきです。

旅の記録を残す人は、とても多くの女性が旅に出ている現在でも稀です。そう考えると、江戸期の旅をする女性の数は、もつともつと多かったですでしょう。

②伊藤常足について

桑原久子さんの師である伊藤常足は、生涯に二度も大旅行をしています。行先はいずれも常足にとつては、本居宣長先生ゆかりの聖地、松坂、そして京、大坂です。

本居宣長は一八〇一年に亡くなりましたが、第一回目の旅は、その八年後の、一八〇九年、常足三六歳の時で、五カ月に及びます。近江から美濃、尾張、伊勢、松坂と回って、かねて念願の本居大人

し)の奥津城(おくつき、山室(やまむろ)へ詣でました。宣長は遺言で、世間並みの仏式葬儀(こちらは空墓です)と、自分独自の神式葬儀(これが実質的な、終のねむりどころ)と二様に行えと、詳しく指図しています。松坂郊外の山室山にある妙楽寺境内の裏山に、「夜中ひそかに埋葬せよ」その墓地には山桜の良木を植えよ」と指示し、それは実行されました。常足は、その山室へ詣でたのです。宣長の息子の本居春庭を訪問し、養子の本居大平(もとおりおひら)に入門したのはこの時です。この本居大平は「門弟千人」と言われた大先生です。また伊勢神宮の神職で、春庭、大平に学んだ考証家であり歌人の足代弘訓(あじろひろのり)と親しくなりました。

二回目の上京は、一八二三年、常足五〇歳の時です。この時も諸名家と交わりましたが、ことに伊勢神宮の権禰宜(ごんねぎ)にして国学者の荒木田久守(あらかたひさもり)を知り、彼の家での歌会に加わっています。紀州では本居大平先生にも会え、『萬葉集』の会談、歌会に参加できたのは幸せでした。

この二度の旅の歌稿を合わせ、伊勢詣日記抄録『山さくら戸』としてまとめます。

京の旅を志す安倍峯子さん、久子さん、宅子さんは、この『山さくら戸』の大きい刺激を受け、旅の意欲をそそられたことでしょう。安倍峯子さんが一八四〇年

に伊勢詣の旅に出、旅日記の『伊勢詣日記』を著します。その翌年の一八四一年に久子さん、宅子さんは旅に出たのでした。

伊藤常足さんが『山さくら戸』を書いたからこそ、安倍峯子さんの『伊勢詣日記』が出来、

安倍峯子さんが『伊勢詣日記』を書いたからこそ、桑原久子さんの『二荒詣日記』が出来、

桑原久子さんが『二荒詣日記』を書いたことが、小田宅子さんの『東路日記』につながったと言えます。

さらに女性の旅日記が書かれるまでの歴史を遡ってみましょう。

伊藤常足は、『土佐日記』(九三五年頃)を表した紀貫之の流れを汲んでいるように思います。

紀貫之は、九〇五年に成立した『古今和歌集』の選者に一人です。彼の書いた「仮名序」は、仮名文字で書かれた最初の本格的な文学論として、その文学史的な意義は大きいと言えます。紀貫之は藤原氏ではありませんから、中央の役人にはなれませんでした。地方の土佐守を終え、海路帰京するまでの旅路を書いたのが『土佐日記』です。彼は、なぜ、女性のふりをして『土佐日記』を書いたのでしょうか?そのころの男性が文章を書くのは、漢文が普通だったので、和歌を交えた散文で書くには「ひらがな」が適していたからです。そして、紀貫之が仮名

で面白い文書を書くのに成功したことから、多くの女性がどんどん日記や物語を書くようになりました。『土佐日記』には農民や漁師などの歌として詠まれた歌も多く出てきます。つまり、誰にでも、歌が詠める、文章が書けるということを示したのです。紀貫之は女性の教育の先駆者であったのかもしれませんが。その後、『更級日記』(菅原孝標女(すがわらのたかすえ)のむすめ、一〇六〇年)などの女性の手による日記が現れます。

このように考えると、伊藤常足はその紀貫之の流れを汲んでいると言えないでしょうか? 明治期の「堅実優良な家庭婦人の育成」をめざした女子専門学校より、今日のジエンダーの視点からすると、女性を主人公にする点で、江戸期の伊藤常足の方が進んでいたとも考えられます。

松尾芭蕉の「おくのほそ道」に登場する女性も、「大和撫子(なごしこ)」的な少女であったり、修行を妨げる遊女であったり、女性が主人公だとはとても思えません。

つまり、桑原久子さんや小田宅子さんのついた先生が立派だったのです。二人の師匠は、歌人であり、国学者でもあり、自ら、全八二巻にも及ぶ『太宰管内志』を著し、多くの門人を抱え、一門の歌集『岡懸(おかのあがた)集』をも残しています。『岡懸集』には、二七二人の作者中、女性作家が三九人、つまり約七人に一人が女性作家だと言うのだから、伊藤

常足の女性の教育への熱心さと女性作家を育てた功績の大きさがわかっていうものです。

伊藤常足から『万葉集』『古今和歌集』『伊勢物語』『平家物語』などの薫陶を受けた二人は、和歌の知識はもちろん、並々ならぬ古典の教養を身につけることができたのでした。

そして、伊藤常足先生の教えが、久子さん、宅子さんの教養を、文学の水準まで導いたことを発掘したのが前田俣だったのです。それは、女性文学の空白時代と言われてきた江戸時代に、「土農工商」の四番目とされた商家の女主人にして歌人である宅子さん・久子さんに光をあてる営みでした。

③田辺聖子

田辺聖子(たなべせいこ 一九二八〜二〇一九)は、大阪市生まれの小説家、随筆家です。

大阪を舞台とした『感傷旅行(センチメンタルジャーニー)』で芥川賞を受賞しました。しかし、純文学の賞である芥川賞の受賞者としての立場を枷(かせ)に感じ、後年に「直木賞の方が欲しかった」と冗談含みで語っています。

芥川賞受賞後、私たちがふだん話しているような飾り気のない大阪弁で書かれた多くの作品を発表しています。古典を題材にした『新源氏物語』などの作品

でも高い評価を受けています。

『姥ざかり花の旅笠』の巻末の参考資料・文献の数は一〇〇近くに達します。

大阪弁風に言うと、「ほんま、ごっついおひとでんなあ〜」。田辺聖子さんに『東路日記』が託されたのもわかる気がします。

『東路日記』は高倉健さんが、「うちの先祖の人が、こういう手記をものしているが、これをわかりやすく読めるようにならないだろうか、面白そうだけど。」と知人に相談されたのがきっかけで、巡り巡って、ふしぎな縁にみちびかれ、田辺聖子さんが『東路日記』を読み解くことになったと言います。

「二年以上も宅子さんらの旅につきあって、私はすっかり彼女たちに友情を感じてしまった。」「女性文化の暗黒時代と思われていた江戸の世で、それも天さがる鄙(び)の地、商賈(しょうご)しようこ 商人のここの家の女たちに、こんなにみやびでゆたかな文化が息づいていたとは。」

田辺聖子さんは『姥ざかり花の旅笠』の「あとがき」にこのように書いていますが、同感です。

『姥ざかり花の旅笠』をよく読んで見ると、「お伊勢詣り」よりも『善光寺詣り』の方に各段に力が入っていることが分かります。庶民仏教の研究に力を入れる五来重の『善光寺まいり』をベースに置いていることからそのことがうかがえます。

時代が変わろうと、治世者が交替しようとして、いつの世も、社会を支えるのは名もない庶民であり、彼・彼女らが秘めつつ活力である。そのような田辺聖子の庶民への絶対的信頼が、筑前のお言葉の心地よいリズム感とともに「聖子版東路日記」の特徴となっています。

また、『姥ざかり花の旅笠』の魅力は、その道草ぶりにあります。当時の女性の道中着や旅行費用に始まり、土地の名産土産物から、歌舞伎や浄瑠璃への傾倒ぶり等々、実に多岐にわたる「道草ぶり」、知的好奇心の旺盛ぶりは、驚嘆に値します。

明治維新という歴史の大転換点の時代に、全国津々浦々の底辺の民衆がツいっばいに努力して、さらに女性たちの生命力が、その歴史の大転換を下支えしていたことを田辺聖子は『東路日記』で見抜きました。そして、それを生き生きと、わかりやすく表現した功績は大きいと言えます。宅子さん、久子さんに留まらず、名前もわからない、筑前の女性だから「おちくさん」「おぜんさん」を形象化し、小説の中で活躍させています。

「聖子版東路日記」を多くの人々に味わっていただきたいとお薦めします。

ここまで見てきた女性の旅日記への流れを単純化すると、

紀貫之↓本居大平↓伊藤常足↓小田宅子・桑原久子↓田辺聖子というラインが、

私の管見ですが見えてきました。もちろん、女性の文学の流れは、もっともっと広く深いものでしょうけれど。

※『女芭蕉の心意気 桑原久子の旅日記から』が完成しました。『芥川だより』に連載したものに、大幅な、加筆・訂正を加えた二二一ページの自費出版の本です。三〇枚ほどの田中真砂子さんの口絵・挿絵がついています。読んでいただける方は、左記の住所までお問い合わせください。

〒五三三〇〇二二 大阪府大阪市

淀川区木川東二一三三

成瀬和之



山茶花



修学院離宮の秋

俳句

影山 武司

いぶし銀の伽藍の屋根や冬立てり
百段を登りて銀杏落葉かな
橋の名の「小橋」てふ橋冬ぬくし
波しぶき風に乗りきて石菫の花
冬銀河父の形見の双眼鏡
半眼の釈迦牟尼仏や月冴ゆる
読経の響く回廊雪催
朱の色の剥げし御塔や冬ざるる
寒椿けふという日はけふとして
後ろ手の背中集めて夕焚火

編集後記

SK生

▲近所の紅葉も散つていよいよ冬がやってくる。酒をあたため紅葉を焼く、という風流事ができるはずもなく、物価の値上がりが続く中、我々の懐具合は寒さがひとしおである。▲さて、今月も投稿者の方たちの御協力で203号を出すことができました。しかし、残念ながら好評であった「同じ青春を過ごしたセツラーの想い」は休載となった。また、復活できるように今後とも努力したい。▲先日、今年の漢字が「税」になったというニュースを聞いた。「税」といえば、少し前のことだが国立科学博物館がクラウドファンディングで約9億円を集めたことが話題になった。国からの予算が不足して博物館の運営が困難になったためだという。税金が適正に使われず民間の寄付に頼らざるを得ないということは恥ずべきことではないか。国立の科学博物館であるのに国が十分な予算を出さないというのだから、どこが文化国家だの科学技術立国だのと胸を張っているのかと思う。いや、ひよっとしたらそんなことはすでに昔物語であって、口に出すのも野暮なかもしれない。とすれば呑気な小生でもこれから先の我が国は大丈夫かなと心配になるではないか。

五七五あるいは五七五七七の短詩型表現が人を引き付けるのはなぜだろうと思ひながら、そのかたちに魅かれていく。詠むのもいいが、読むのもいいなあという思ひからも抜けきれない。読むこと、そしてそれを表現することもある意味で創造だからだろう。今回も読むことを楽しみたい。

あるがまま受け入れ今を楽しもう

和俊

無理せずに素顔のまま古希を待つ

初子

抜き素顔のまま生きていく

幸

思いつ切り背伸びをしたのは、遠い昔に虹を見たとき。今はあるがままの自分を自覚することができる。それはこれから生きる力となる。

帰宅して素顔に戻る至福時

秋子

番傘川柳の師・岸本水府に、「ぬぎすててうちが一番よいといふ」句があります。実感ですね。

恩師から受けた激励いま会得

孝子

その時は分からなくても、いろいろ経験し生きて行く中で会得するものは沢山あります。「人間はいつかわかれればそれでいい」のかもしれない。

負けないと思う私を褒めてやる

幸子

今日も、負けないと思う私がいる。自分のポテンシャルを高めるのは、自分です。

洗えない心のシミが顔に出る

喜一郎

ずっと以前のこと。♪てめえの面 磨き

もせず 友達面する奴 大嫌い♪と

「He・La・He・La」を歌う長渕 剛の歌

磨けば、「おれを重んじよ」と言えるような人間になれるのだろう、と思ったものです。

あれやこれ時の流れが重荷解く

修一

『時』という歌の中に小椋 佳は、「時に長さがあるなんて 誰が告げたのですか」、「時がすべて流すなんて 誰が言ったのですか」、そして「時はもとに戻れないと 誰が決めたのですか」と書いています。ただ流れるのではなく積んでいく時が、あれやこれをしかるべき結論に導いてくれます。

澄み切った孫のまなこに吸い込まれ

喜一郎

「世の中の明るさのみを吸ふごとき黒き瞳の今も目にあり」と歌ったのは石川啄木。百年以上も前のことでした。目は人の心を映す鏡。それを曇らせる理不尽を許す訳にはいきません。

こんなにも息子の世話になるのかな

益枝

「人生百年ますます恩が返せない」と思うこの頃。しかし息子というものは(娘だつてきつと)、もの思う心の中に優しさをつぱい持っています。幼い子たちをあんなにも世話してきたあなた。世の中は、「あんなにも世話しこんな世話になる」、その繰り返しのようには思いません。

ほんのりと老女微笑みあんだ誰

喜代志

満天に星を探した父の通夜

喜代志

一句目。私にも、「僕は誰わかりますかと母に問う」、そんな日がありました。

二句目。父が逝った通夜の夜。父の死を悼み、満天の星の中に父の星を探す心に、

父との思い出が走馬灯のように浮かんでいきます。

大雨にテレビの前でただ祈る

博文

地球は水の星、雨が降るのはあたりまえ。しかし昨今の雨の降り方は尋常ではありません。地球は、「雨に無事祈るしかない水の星」になってしまったのでしようか。あの雲に乗って地球を見てみたい みずえ 茨木のり子という詩人もそんな思ひがあったようです。彼女の「水の星」の一節です。「……生まれこのかた なにに一番驚いたかと言え 水一滴もこぼさずに廻る地球を外からパチリと写した一枚の写真 こういうところに棲んでいましたか これを見なかつた昔の人は 線引きできるほどの意識の差が出てくる筈なのに みんなわりあいぼんやりとしている 太陽からの距離がほどほどでそれで水がたつぷりと渦まくだのであるらしい 中は火の玉だつていうのに ありえない不思議 蒼い星 ……」金があれば宇宙旅行もでき「無重力金で重力買時代」ですが、水の星の不思議にこそ思ひを致したい。